

「とともに」が考える図書館のヴィジョン

「とともに」の二〇年を振り返ると、多岐にわたる活動を行い、そこから得た多くの経験、学びが「とともに」の財産になっていると実感します。

移管問題では図書館のあり方について深く考える機会をもち、百周年記念事業、旧図書館の保存運動では図書館の歴史のみならず近代鎌倉の歴史と文化について多くのことを学び、協働事業や地域館問題では地域にとって身近に図書館があることの重要性を体験的に理解することができました。

二〇一六年に「とともに」は図書館のヴィジョンの確立を求める陳情を行い採択されました。これを受けて市の図書館は第3次サービス計画とともにヴィジョンの策定を進めています。

今回の二〇周年記念誌を編むにあたって図書館のヴィジョンづくりに市民ができることがあるのではないかと考え、多くの方々から図書館体験、図書館の在り方や市の図書館に望むことを寄稿していただきました。「とともに」が二〇年の歴史から学んだことも生かしつつ今後の市の図書館が進むべき方向について、いくつかの提言をしたいと思います。

1. 図書館は学びのセーフティネット

人間は三つの図書館を持っているという言葉があります（カール・セーガン『コスモス』）。その三つとは、生存のためのプログラムである遺伝子、後に習得した知識・技術を刻み込んだ大脳皮質、そして言葉が文字化され文書として体外に蓄積された記憶装置です。

遺伝子や脳に含まれる情報量だけでも大規模図書館の蔵書に匹敵するほどと言われますが、無文字社会から文字社会に移行すると、従来と比べようもないほどの膨大な知の集積が図られ、社会が高度化・複雑化すればするほど、それらを共有し知的欲求を満たすことが容易でなくなります。

それでも人が人らしく生きていくためには知的欲求を満たす学びが不可欠です。そのための体外記憶装置は様々なかたちで存在しますが、その代表的存在の一つが図書館です。

図書館には多種多様な資料・情報が時間をかけて集積されています。新刊書や話題本中心の書店では

出会えない蔵書の厚みや奥行きがあり、ごく日常的な生活上必要な知識を得られるだけでなく、大きな問題に直面したときに基礎的な情報や異なる立場からの識見を知ることができ、自分と同じような悩みを抱えた先人たちの様々な体験から多くのことを学ぶこともできます。しかも、これらの資料・情報を誰もが自由に、そして無料で利用できます。その意味で図書館は学びのセーフティネットといえます。

2. 誰にとっても身近にあって利用しやすい図書館

一つの図書館のサービスエリア、つまりその図書館を利用する人の地理的範囲はそう広くはありません。図書館を利用する人の大部分は時間距離にして十五分以内のところに居住すると言われています。図書館は日常的に使う施設であり、行動範囲が広くない子どもや高齢者も利用します。したがって地域のどこに住んでいても図書館が身近にあることが求められます。

そのためには、市内の図書館サービスが届きにくい地域に自動車図書館を巡回させるなど、きめ細かなサービスポイントの配置が必要です。

誰にとっても図書館が身近にあるというのは、このような距離的に近いということだけを意味するものではありません。なぜなら様々な身体的理由や言葉の壁などで図書館が遠い存在になっている人

たちがいるからです。

こうしたハンディキャップを負っている人に図書館サービスを届けるには、対面朗読、郵送サービスや宅配サービスの実施・普及、長期療養者のための病院への貸出、多言語の資料収集などが求められます。これができて初めて誰にとっても身近にあって利用しやすい図書館が実現します。

さらに、利用しやすい点では、飲食や雑談ができるスペース、中高生がグループ学習できる部屋、図書館や図書館関連団体が企画する事業で使えるホールなど、施設面での充実も必要です。

3. 多様で豊富な資料・情報を備えている図書館

図書館サービスの基本は資料提供にあります。貸出だけでなくレファレンス、つまり市民からの調べものの相談に応じるときも資料を示しながら行うものなので、多様な市民の要求に応えられる豊富で系統だった資料の収集・集積が求められます。そのためには資料購入費が十分に確保されていなければなりません。

それでも一つの図書館、あるいは一自治体の図書館だけで市民の資料要求にこたえることは容易ではありません。そのために公共図書館同士のネットワークを構築し資料の相互利用を図っています。また図書館ネットワークは専門図書館や大学図書館など館種を超えたかたちでも行われます。

また、子どもの読書を計画的に進める活動の軸となる公共図書館と小中学校との連携を図るためには、市内の学校図書館資料の目録をデジタル化し共通のデータベースを構築し、学校間、学校と公共図書館間の資料の相互利用を容易かつ効率的に行うことが有効です。

さらに、近年では図書館以外の施設や機関との連携、いわゆるMLA連携が注目されています。博物館（ミュージアム）、図書館（ライブラリー）、文書館（アーカイブズ）の連携です。現在の鎌倉市で考えるならば、国宝館、歴史文化交流館、文学館、川喜多映画記念館、文化財課などが所蔵する資料等の目録化・デジタル化を進め、市内の文化資産ネットワークを構築することで市民が多種多様な資料を利用できるようになります。将来的には総合博物館や文書館の設置による本格的なMLA連携の実現が望まれます。

「所蔵する資料等の目録化・デジタル化」という点で図書館もまた立ち遅れている部分があります。それは図書館の三階にある近代史資料室です。この部屋に市民は自由に出入りできませんし、所蔵されている近代鎌倉に関する貴重な資料を検索し閲覧できるかたちにはなっていません。一日も早く目録化・デジタル化を進め市民に公開されることが必要です。近代史資料室の整備・充実には鎌倉ならではの図書館をアピールするためにも重要です。

4. 街づくり、地域づくりの拠点となる図書館

図書館の利用は基本的に個人利用です。一人一人の市民がそれぞれ異なる生活上、工作上、勉学上の必要性にもとづいて資料を探したり、個人の楽しみや生きるうえでの糧となるような読書のために本を選ぶところです。

しかも自分の都合に合わせて来館し、何時間いても咎められることはありません。プライバシーは守られ、安心して過ごすことができます。その意味では図書館はいわゆる居場所としての役割も果たしています。

このように個人として便利で安心して使える場所であると同時に、図書館は様々な情報発信や多様な催しを通して人を集め、それをきっかけに地域市民同士の出会いと交流につながるような場所でもあります。個人の求めに応じてサービスする図書館は概して受け身になりがちですが、図書館のほうから積極的に仕掛けることで市民が集い交流する地域コミュニティの拠点としての役割を果たすことができます。

また図書館は、行政はもちろんのこと地域の課題解決に取り組む市民や議員に必要な資料・情報を提供する役割があります。そのためには行政の各部署と連携したセミナー開催や資料展示、市民団体との交流や協働事業の実施、議員や議会図書室への資料支援などが必要です。

5. 経験豊富で頼りになる職員がいる図書館

人と本を結びつける、それが図書館職員の最も重要な仕事です。図書館には多くの本が並んでおり、自分が求める本を探すのは利用者にとってそれほど簡単なことはありません。探しやすいように分類し配架されていますが、図書館の分類法を熟知している利用者はごく少数です。

図書館が今話題になっているテーマを選び関連する本を一か所に陳列しようとすると、様々な分類の棚から集めることになります。この例だけでも専門職としての図書館職員の存在がいかに重要か理解できます。多くの出版物から必要な本を選択し、利用しやすいように書架に並べ、それでも利用者が探しにくいときは的確に支援する技量をもっている職員が不可欠だということです。

そういう職員が育つには、司書資格を持ち長年の勤務を経て、自館の蔵書を熟知し利用者の資料要求に対応する経験を積むことが必要です。

また、図書館職員の仕事は資料に関するものだけではなくありません。図書館の管理運営、活動計画の検討・立案、それを踏まえた様々な事業の実施、他機関との連携などの業務があり、これらの仕事を遂行するには権限と責任を持った職員、つまり正規職員が十分に確保されねばなりません。

以上のことから司書有資格者を正規職員として新規採用し、世代交代を支障なく進めること、経験

や技術を継承する継続的な研修を行うことが大切になってきます。

6. 市民が支え、参画する図書館

図書館は何のためにあるのかということも重要ですが、図書館は誰のものかと問うことも必要です。鎌倉の図書館の歴史を振り返ると市民一人一人が図書館を支えてきたことがわかります。それだけの力が市民にありました。それでも図書館は市民のものですと言い切るためにはさらに必要なものがあります。それは図書館運営に市民が参画する仕組みです。

図書館協議会や利用者懇談会もありますが、図書館を「共につくり、育てる」という大きな目標のもとに図書館運営のあり方や具体的な活動について財政事情にとらわれない自由で幅広い議論ができる場が必要です。

市民が図書館に求めるものは多様です。これに図書館が個別に対応するのは限界があり、また適切でない場合もあります。図書館の基本的な考えを受けて市民同士が話し合い、内容をふくらませ、それを図書館が次の活動に生かしていくような協議の場が望まれます。そして、これを実現するためには、鎌倉に必要な図書館は鎌倉市民が自分でつくっていかねばならないと市民自身が自覚することも大事です。